

## 教科等と関連付けた特別活動の指導法

——茨城県における教科教育と特別活動の連携の試み——

豊田 昌幸\*・開田 晃央\*\*

(2021年10月19日受理)

The instruction method of extracurricular activities in connection with subject education :  
Attempt of the cooperation of subject education and extracurricular activities in Ibaraki

Masayuki TOYODA and Teruo KAITA

キーワード:学習指導要領, 特別活動, 学級活動, 内容(2), 教科等と関連付けた指導

特別活動は、小学校・中学校学習指導要領(2017.3 告示)による取り組みが 2018 年度から行われている。しかし、その趣旨が十分に生かされた指導が教育現場で行われていないのではないかとの問題意識から特別活動について、特に、教科等との関連を図った学級活動の指導に焦点を当てて研究に取り組んだ。

研究の内容の柱は、茨城県内の教員を対象とする意識実態調査及び他教科等との関連を図った学級活動の指導例の提案の二つである。意識実態調査では、他教科等と関連を図った学級活動が十分に行われていない現場の状況を明らかにし、指導構想及び指導例の提案では、教科等と関連を図った指導においては、「教科間の共通性(育成する資質・能力)」等を明確にすることが重要であることを示した。

### はじめに

今回の小学校・中学校学習指導要領(2017.3 告示)[以下「学習指導要領」という。]は、小学校は 2020 年度から、中学校は 2021 年度から全面実施している。しかし、総則、総合的な学習の時間、特別活動は教科書の対応を要するものではないため、2018 年度から現行の学習指導要領により先行実施している。今回の学習指導要領ではカリキュラム・マネジメントの確立を目指し、その中で、教育内容を教科横断的な視点で組み立て、教科等の関連を図った指導をしていくことが求められている。しかし、現場の教員の声を拾ってみると、先行実施しているはずの特別活動において、教科等の関連を図った指導を行っているという声が少ない。このことが研究の動機となっている。

---

\*茨城大学教育学研究科 \*\*茨城大学教育学研究科

本研究の対象範囲としては、特別活動の内容が多岐にわたることから、学級活動「内容(2)」に焦点を絞って、研究を行うこととした。

研究のねらいは、二つある。ひとつは、特別活動の内容について、教科等と関連を図った指導が行われているか、茨城県内の教員を対象に意識実態調査を行い、現状を把握するとともに課題を明らかにすることである。

二つ目は、他教科等と関連を図った学級活動の指導構想、指導の具体例及び指導のポイントを明らかにし、実践上の課題を解決する方向性を示すことである。

なお、本論文は、豊田が1～6頁「はじめに」「学習指導要領と特別活動・学級活動について」「意識実態調査及び結果の考察」、12頁「終わりに」を執筆し、7～10頁「指導構想及び指導例」、11頁「指導構想及び指導例の考察」を開田が執筆した。

## 学習指導要領と特別活動・学級活動について

### 1 学習指導要領(2017)における「他教科等と関連を図った指導」について

学習指導要領では、他教科等と関連を図った指導を行うことが求められており、そのことが学習指導要領の第1章第2の3の(3)に示されている。

#### 【学習指導要領 第1章第2の3の(3)】

[小学校]

(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項

イ 各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。

エ 児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、児童の発達の段階や指導内容の関連性等を踏まえつつ、合科的・関連的な指導を進めること。 P7

[中学校]

(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項

イ 各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。 P7

※ 下線部は筆者

### 2 特別活動「学級活動」の内容と「他教科等と関連を図った指導」及び学習過程

#### (1) 学級活動の内容と「他教科等と関連を図った指導」

学級活動の内容は大きくは(1)(2)(3)の三つに分けられる。(1)(2)(3)の項目は、さらに細かく分けられ、小学校は10の内容、中学校は11の内容となっている。また、小学校学習指導要領解説特別活動編(2017)の第3章第1節の「3 学級活動の指導計画/(2)内容相互、各教科、道徳科、外国語活動及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図る」で他教科等と関連を図った指導について説明をしている。学級活動内容(1)(2)(3)及び他教科との関連を図った指導について記述されている箇所は次のとおりである。

特別活動「学級活動」の内容	
<p style="text-align: center;"><b>【小学校】</b></p> <p>(1) 学級や学校における生活づくりへの参画                      ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決                      イ 学級内の組織づくりや役割の自覚                      ウ 学校における多様な集団の生活の向上</p> <p>(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全                      ア 基本的な生活習慣の形成                      イ よりよい人間関係の形成                      ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成                      エ 食育の視点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成</p> <p>(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現                      ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成                      イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解                      ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用</p> <p style="text-align: right;">小学校学習指導要領 P164-165</p>	<p style="text-align: center;"><b>【中学校】</b></p> <p>(1)                      ア                      イ <u>※小学校と異なる記述のみ記載</u>                      ウ</p> <p>(2)                      ア 自他の個性の理解と尊重, よりよい人間関係の形成                      イ 男女相互の理解と協力                      ウ 思春期の不安や悩みの解決, 性的な発達への対応                      エ <u>※ 小学校ウと同じ</u>                      オ <u>※ 小学校エと同じ</u></p> <p>(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現                      ア 社会生活, 職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用                      イ 社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成                      ウ 主体的な進路の選択と将来設計</p> <p style="text-align: right;">中学校学習指導要領 P147-148</p>

**【小学校学習指導要領解説 特別活動編 第3章第1節の「3 学級活動の指導計画の(2)」**

…「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けて、児童にどのような資質・能力を育むかを明確にし、それを育む上で効果的な学習内容や活動を組み立て、各教科等における学びと関連付けていくことが不可欠である。そこで、各教科等で身に付けた資質・能力などを、学級活動においてよりよく活用できるようにすることが大切となる。また、学級活動で取り扱う内容について各教科等の学習内容との関連を図って指導の効果を高めたり、各教科等の学習内容との関連を踏まえて学級活動の指導内容を重点化したりすることも考えられる。さらに、学級活動で身に付けた資質・能力を各教科等の学習に生かすようにすることも大切である。…

小学校学習指導要領特別活動編 P64

※ 下線部は筆者

※中学校学習指導要領特別活動編 P64 にも小学校と記述内容は異なるが、同じ意味の内容の記述がある。

(2) 学級活動の内容(2)(3)の学習過程

学級活動の内容(2)(3)の学習過程については、学習指導要領解説特別活動編(小学校 P45-46/中学校 P43-44)に記述されている。小学校と中学校で基本的な学習過程に大きな違いはない。学習指導要領特別活動編の内容を踏まえ、小学校を例にして説明すると、内容(2)(3)については、課題内容に違いはあるが、「①問題の発見・確認」「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」「④決めたことの実践」「⑤振り返り」という基本的な学習過程については同じである。

始めに、内容(1)の「議題」と内容(2)(3)の「題材」の違いを押さえると、児童によって提案されたことについて、教師の適切な指導の下に学級活動(1) で取り上げる内容を「議題」と称し、教師がこれらの活動で取り上げたいことをあらかじめ年間指導計画に即して設定した内容を「題材」と称している。

「①問題の発見・確認」では、児童一人一人が日常生活や将来に向けた自己の生き方に関して、課題を確認し、解決の見通しをもつことができるようにし、「②解決方法等の話し合い」「③解決方法の決定」では、話し合いを通して自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりして自分に合った解決方法を自分で決めるなど、「意思決定」をする。「④決めたことの実践」「⑤振り返り」では、意思決定しただけで終わることなく、決めたことについて粘り強く実践したり、一連の活動を振り返って成果や課題を確認し、自分の努力に自信を深めたり、更なる課題の解決に取り組もうとする意欲を高めたりする。以上のような学習過程を図にすると次のようになる。

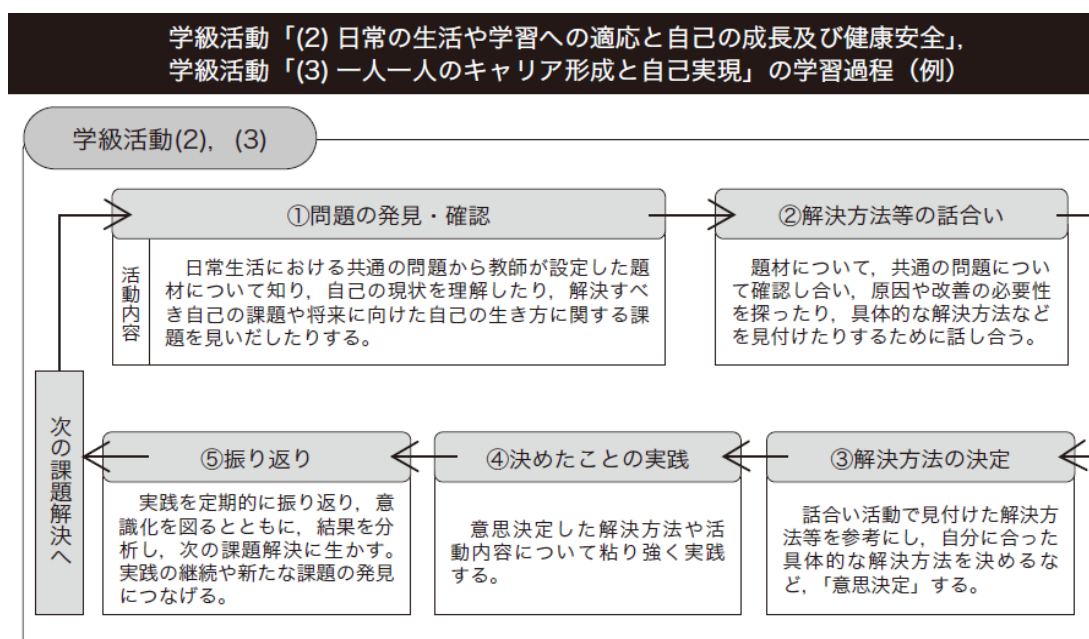


図1 小学校の学習過程例

出典:「小学校学習指導要領解説特別活動編」.2017.P46.

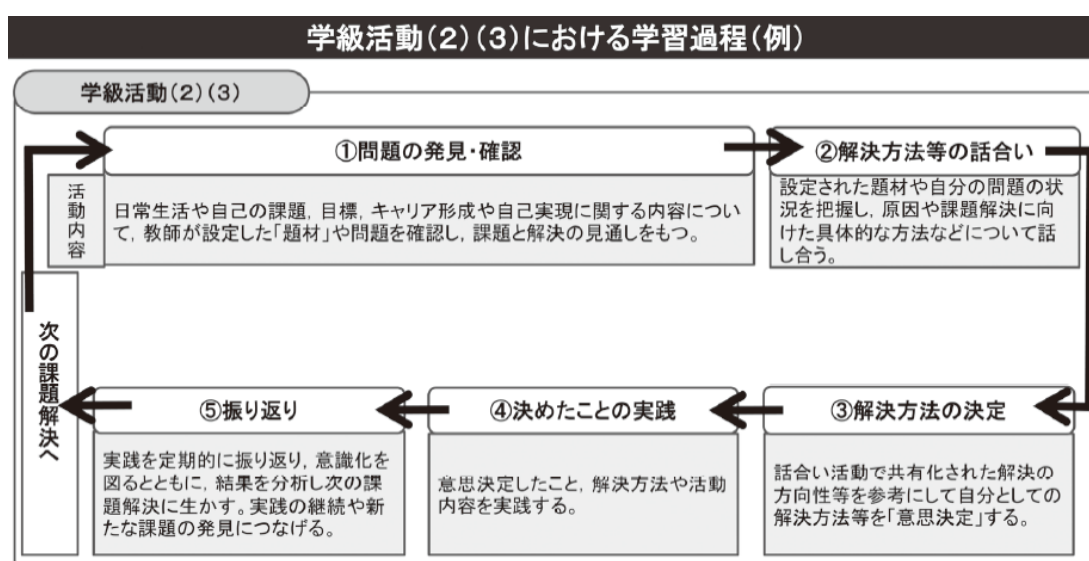


図2 中学校の学習過程例

出典:「中学校学習指導要領解説特別活動編」.2017.P44.

## 意識実態調査及び結果の考察

### 1 意識実態調査の質問紙内容

「他教科等と関連を図った学級活動(2)(3)の指導」について下記の設問による意識実態調査を県内の小・中学校の教員を対象に実施した。

1 … 略 …

※ 年代別の属性を問う質問あり

2 今回の学習指導要領では「教科等横断的な視点からの指導」「教科間の指導の関連付け」が重要であるとされています。学級活動の指導において、これらのことを踏まえた指導をしているか、うかがいます。

(1) 学級活動（内容：(2)日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全）について、他教科等(※1)と関連を図った計画的な指導(※2)をしていますか。当てはまる記号(A.B)に○を付けてください。

A: 指導している — B: 指導していない

(※1)小学校:道徳外国語総合を含む各教科

中学校:道徳総合を含む各教科

(※2)年間指導計画で位置づけられており、それに基づいて指導している。

(1)－①[Aを選んだ方にうかがいます]

どのような教科等とどのような内容で関連付けをした指導をしていますか、簡潔にご記入ください。

(1)－②[Bを選んだ方にうかがいます]

Bを選んだ理由を簡潔にご記入ください。

(2) 学級活動（内容：(3)一人一人のキャリア形成と自己実現）について、他教科等と関連を図った計画的な指導をしていますか。当てはまる記号(A.B)に○を付けてください。

A: 指導している — B: 指導していない

(2)－①[Aを選んだ方にうかがいます]

どのような教科等とどのような内容で関連付けた指導をしていますか、簡潔にご記入ください。

(2)－②[Bを選んだ方にうかがいます]

Bを選んだ理由を簡潔にご記入ください。

#### 資料1 「他教科等と関連を図った学級活動(2)(3)の指導」に関する意識実態調査の内容

※県内公立小中学校 23 校(内訳:小学校 12 校, 中学校 11 校), 267 人の教員(内訳:小学校 152 人/中学校 115 人)を対象として、2021 年3月3日～2021 年3月 23 日に実施

## 2 意識実態調査の結果と考察

[小・中学校全体として]

小・中学校全体で、他教科等と関連を図った指導(内容(2)(3))をしている割合は50%を下回っており憂慮すべき状況である。その理由として、多くの教員が「指導の具体例が分からない」「単独の教科等の指導で手一杯」等を挙げている。新学習指導要領への移行・実施初期に関わる研修や準備等の業務に、さらに、働き方改革やコロナ渦へ対応も加わり、負担増になっていること、また、それらはアクセルとブレーキを同時に踏む難しい対応であり現場が苦慮していることなどが影響していると考えられる。研修・準備不足等のため、新学習指導要領の理解が現場に浸透していない状況もうかがえる。

[小・中学校の比較]

他教科等と関連を図った指導を行っている割合は、小学校では、内容(2)が53.3%、(3)が59.2%であるのに対して、中学校では、内容(2)が42.6%、(3)が37.4%と、10%以上も低い。その理由として、新学習指導要領の完全実施が小学校は2020年度からであるのに対して中学校は2021年度からの実施となっていることが影響していると考えられる。中学校で他教科等と関連を図った指導をしていない理由として「年間指導計画への位置付けがない」の割合が(2)(3)ともに30%を超えている。中学校では学習指導要領に準拠した適切な年間指導計画を作成していない学校が多く、対応の遅れが目立つ。特別活動は特別の措置で2018年度から先行実施されていることを考慮すると、その遅れは極めて憂慮される。

[年代別の比較]

表1には示してはならないが、意識実態調査において年代別の指導状況も調査している。年代別に、他教科等との関連指導をしていない割合を示すと「50～60歳代：32.0%」「40歳代：39.0%」「30歳代：50.5%」「20歳代：70.5%」である。若い世代ほど、他教科等との関連指導を行っていない傾向が顕著に見られる。その理由として、「指導の具体例が分からない」を挙げる教員が多い。表1からもその一端がうかがえる。「指導の具体例が分からない」という現場の困り感に対応した指導例を示していくことが求められる。

表1 「他教科等と関連を図った学級活動(2)(3)の指導」に関する意識実態調査結果

【小・中学校】

他教科等と関連を図った指導			
学習活動(2)		学級活動(3)	
実施している	していない	実施している	していない
48.7 %	51.3 %	49.8 %	50.2 %
指導していない理由 ※回答記述を類型化/複数回答有			
33.6 %	指導の具体例が分からない	26.9 %	
22.6 %	年間指導計画の位置付けがない	28.4 %	
34.3 %	単独の教科等の指導で手一杯	25.4 %	
10.2 %	他教科等との関連が分からない	11.2 %	
9.5 %	その他	13.4 %	

【小学校】

他教科等と関連を図った指導			
学習活動(2)		学級活動(3)	
実施している	していない	実施している	していない
53.3 %	46.7 %	59.2 %	40.8 %
指導していない理由 ※回答記述を類型化/複数回答有			
33.8 %	指導の具体例が分からない	26.4 %	
14.1 %	年間指導計画の位置付けがない	30.6 %	
40.8 %	単独の教科等の指導で手一杯	26.4 %	
9.9 %	他教科等との関連が分からない	12.5 %	
9.9 %	その他	8.3 %	

【中学校】

他教科等と関連を図った指導			
学習活動(2)		学級活動(3)	
実施している	していない	実施している	していない
42.6 %	57.4 %	37.4 %	62.6 %
指導していない理由 ※回答記述を類型化/複数回答有			
33.3 %	指導の具体例が分からない	27.8 %	
31.8 %	年間指導計画の位置付けがない	31.9 %	
27.3 %	単独の教科等の指導で手一杯	27.8 %	
10.6 %	他教科等との関連が分からない	15.3 %	
9.1 %	その他	8.3 %	

調査対象：県内小・中学校教員(小12校152人/中11校115人)

調査期間：2021年3月3日～3月23日

## 指導構想及び指導例

### 1 指導構想

#### (1) 学級活動の内容・題材

題材 第1学年	内容(2): 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 「宿泊共同学習の係活動のおける学級への貢献度を認め合おう」
---------	--

#### (2) 本題材で育成を目指す資質・能力

- 学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成のための手順や活動の方法を身に付けている。
- 学級や学校生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができる。
- 生活の諸問題上の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における**人間関係をよりよく形成し、他者と協働(横断的指導で育成する資質・能力)**しながら日常生活の向上を図ろうとする。

#### (3) 評価規準(内容のまとまりごとの評価規準)

よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解している。	学級をよりよくするための課題を見だし、課題解決に向け、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践している。	学級や学校における人間関係を形成し、見通しをもったり振り返ったりしながら、他者と協働して日常生活の向上を図ろうとする。

#### (4) 指導と評価の計画

図3は、教科等横断的な指導で育成する共通の資質・能力を「人間関係形成能力」と位置付けた本実践の指導構想図である。一連の指導を「縦軸」として、①「宿泊共同学習」を実施するための具体的な活動計画(3時間)、②「特別な教科道徳」における指導計画(1時間)、③「国語」における指導計画(2時間)を横軸とし、教科等横断的な学習活動を計画した。このことにより、特別活動(学級活動)、国語等との教科等横断的な関連の中で、総合的に学習者の資質・能力を育てていくことを目指すことができると考えた。

表2は、図3の指導構想に関連した一連の活動と評価である。**ゴシック下線部**は各教科等において育成

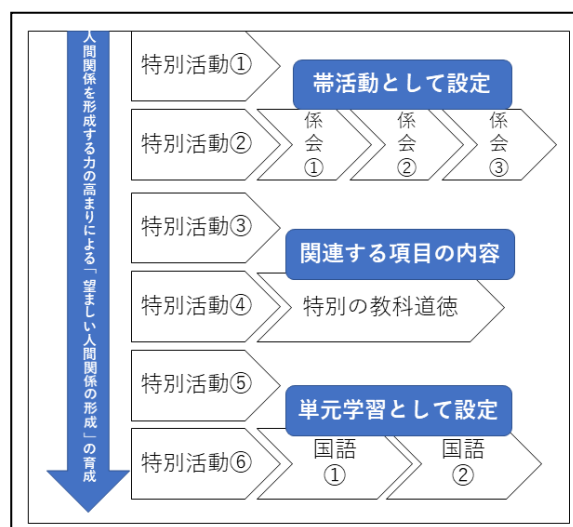


図3 教科等を横断した指導構想図

する共通の資質・能力「**人間関係形成能力**」に関わる姿である。

表2【一連の活動と評価】

時間	ねらい・学習活動	目指す生徒の姿		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的態度
学年集会	「宿泊共同学習」のねらい及びガイダンス		課題発見, 解決への見通しをもつ姿	
係会	「帯活動としての係会」	<b>合意形成のための手順や活動の方法を理解する姿</b>		
朝の会及び帰りの会	「学級生活班を, 宿泊共同学習の班で形成」	PDCA サイクルを構築し, <b>協働の大切さを理解する姿</b>		
各教科等における班活動	「学習班を宿泊共同学習活動班で形成し自分の役割を基に活動を構成する」			
学校行事	「宿泊共同学習」		<b>合意形成を図り, 協働しながら実践する姿</b>	
本時①(学級活動)	「「ほめほめメッセージ」 ○ねらい ・人間関係の形成, 日常生活の向上 ○活動 ・友達への賞賛, 理解			<b>身に付けたことを生かし, 学級や学校における人間関係をよりよく形成し, 他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする姿</b>
本時②(国語)	「内容を整理して説明する」 ○ねらい ・振り返りの言語化 ○活動 ・言語化した内容の発信			<b>身に付けたことを生かし, 学習活動において望ましい関係や協働を構築する姿</b>



## 2 指導例

(1) 指導例 I (指導構想図の特別活動⑥ 一学級活動一)

① 題材 1学年「宿泊共同学習の係活動における学級への貢献度を認め合おう」

② 目指す生徒の姿(人間関係形成力と関わる姿)

- ・ 生徒相互が認め合う活動を通して、他者と協働して取り組むことの大切さを理解している。
- ・ 望ましい人間関係を形成し、他者と協働して日常生活の向上を図ろうとしている。

③ 本時の展開 **※下線部ゴシックは「人間関係形成能力」/国語(事後指導)と関わる部分**

時	生徒の活動	○目指す生徒の姿 指導上の留意点
導入	1「宿泊共同学習」において、班の仲間への貢献度はどれくらいかという問いについて考えを形成することを確認する。	・学級活動と、国語での学習のコラボレーションであることを確認する。
展開	2 班の友達が、班の活動にどのように貢献していたか、具体的に賞賛するメッセージを記述する。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5分前行動の声掛けを何度もしてくれた。みんなが時間を意識して行動することができた。</li> <li>・ 自分の仕事だけでなく、みんなのために進んで手伝ってくれてとても助かった。</li> <li>・ けがをした時に一緒に付いて来てくれた。不安な気持ちがなくなった。</li> </ul>	・「信頼性」を担保するため、賞賛と肯定を基に記述することを助言する。 ・当日の活動のみではなく、班を発足してから今までのことを総括して交流することを助言する。 <b>○生徒相互が認め合う活動を通して、他者と協働して取り組むことの大切さを理解している。</b> 【知識・技能】 〈ワークシート〉
	3 友達へのメッセージを、感謝の言葉を添えて渡し合う。	
	4 交流や、共有した内容を基に、学級における望ましい人間関係を構築することができたか、またその理由を発表する。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に活動する中で、あまり話したことのない友達とたくさん話すことができた。</li> <li>・宿泊共同学習の準備や実際の活動の中で成功させるために様々な大変なことがあったが、みんなで乗り越えることで、クラスの仲が深まった。</li> </ul>	○学級において望ましい <b>人間関係を形成し、他者と協働して日常生活の向上を図ろうとしている。</b> 【主体的態度】 〈発言・記述内容〉
終末	5 <b>学級活動を基に、国語科の学習を進めることを確認</b> する。 (横断的な指導につなぐ)	・本時の内容を情報とし <b>自分の考えを伝え合う活動を行うことを伝達する。</b>

(2) 指導例Ⅱ (指導構想図の国語一 国語①, 国語②一)

① 単元名 第1学年「内容を整理して説明しよう」

② 育成する資質・能力

・ 意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること。 [知識及び技能] (2)ア

・ **根拠を明確にしなが、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。**

**※上記の資質・能力は「人間関係形成能力」にも関わると考える。** [思考力, 判断力, 表現力等] B(1)ウ

③ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。 (2)ア	①「書くこと」において、自己の体験と友達からの言葉の引用を根拠として明確にしなが、 <b>自分評価が伝わる文章になるように工夫することができる。</b> B(1)ウ	

④ 展開(2時間扱い) **※下線部ゴシックは「人間関係形成能力」/特別活動(事前指導)と関わる部分**

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
国語①(本時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習の見通しをもつ。</li> <li>○ <b>貢献度を改めて評価する。</b></li> <li>○ 構成メモをもとに、自分の振り返りを<b>多様な他者が目にする報告書として記述する。</b></li> <li>【記述するための視点】</li> <li>・「説明する」という言語活動において、①したがって②よって③それゆえの三つの「必然」の接続表現のいづれかを用いること。</li> <li>・「主張」+「根拠」で自己の評価を整理すること。</li> <li>(ICT ツールを活用して入力)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>前時(学級活動)で行った活動を基に本時の学習することを伝える。</b></li> <li>・ ①したがって、②よって、③それゆえ、という「必然」の接続表現が根拠と主張の整合性を図る上で効果的に活用できることが認識できるようにする。</li> <li>・ 「私の活動は〇〇点だ。なぜなら～(二つの根拠)から、～のように評価できるからだ。」</li> <li>上記のような話型を提示し、自己の主張と根拠が明確になるようにする。</li> </ul>	<p>[知識・技能]</p> <p>ワークシート</p> <p>意見と根拠など情報と情報との関係について理解しているか確認する。</p>
国語②	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習のねらいや進め方をつかみ、学習の見通しをもつ。</li> <li>○ <b>第1時及び本時で記述した内容をもとに、友達と交流する。</b></li> <li>○ <b>交流した内容を発表する。</b></li> <li>○ 本単元で身に付けた力について共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ タブレットと ICT ツールを活用し、学習者が記述した入力内容を多面的・多角的に分析することができるようにする。</li> </ul>	<p>[思考・判断・表現]</p> <p>入力内容</p> <p>・ <b>根拠として明確にしなが、自分評価が伝わる文章になるように工夫することができるか確認する。</b></p>

## 指導構想及び指導例の考察

本研究の指導構想及び指導例では、学級活動としての資質・能力である人間関係形成能力とその資質・能力と関連する国語の資質・能力とを横断的な指導でつなぐことを意識している。本研究の指導構想及び指導例における横断的な指導のポイントを示す。

指導例Ⅰの学級活動では、その資質・能力を育むために、題材を「宿泊共同学習の係活動における学級への貢献度を認め合おう」と置き、学校行事の振り返りとして、班の仲間の貢献度を互いに称賛する点に置いている。具体的活動としては、友達へのメッセージを感謝の言葉を添えて渡し合う。そのような活動をすることにより、目指す生徒の姿(人間関係形成力と関わる姿)として「生徒相互が認め合う活動を通して、他者と協働して取り組むことの大切さを理解している。」と「望ましい人間関係を形成し、他者と協働して日常生活の向上を図ろうとしている。」に迫ろうとする特別活動の授業である。

指導例Ⅱの国語(本時)との横断的な指導を想定し、導入場面では、学級活動と国語を横断的にとらえることを生徒に示し、見通しを持たせている。さらに、終末場面では、本時の内容を情報として自分の考えを伝え合う活動を行うことを示し、国語の学習へとつないでいる。

指導例Ⅱの国語(本時)では、単元名を第1学年「内容を整理して説明しよう」と置き、資質・能力に「根拠を明確にしなが、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。」を学級活動における資質・能力に関わるととらえている。導入では、動機付けとして、指導例Ⅰの学級活動で行った活動をもとに、本時の学習することを伝える。学習活動として、前時で行った貢献度を評価する活動を改めて行うことにより、前時を想起させている。学級活動との関連を意識させて、前時の振り返りを報告書としてよりよくしていく活動を行う。国語(本時)を受けて、指導例Ⅱの国語(2時)では、交流活動を設けて国語として身に付けたい力の定着を図っている。

学級活動と国語と関連させる資質・能力を意識した学習内容を生徒に示し、見通しを持たせながら取り組ませていくことが、学級活動との教科横断的な指導としては重要なポイントとなる。その点がしっかりと押さえられていけば、人間関係を形成する能力を育むことに役立つだけでなく横断的に取り組んだ教科等の力をも引き上げることが期待できる。また、教科横断的な指導後、さらに学級活動でどうつないで実践していくかが、人間関係形成能力をより育てていくことにつながっていくであろう。このように、他教科と関連付けた学級活動の指導は、学級活動の充実だけでなく教科の学習も充実させると考える。

今回、学級活動と国語科でのマイクロなつながりを主にした指導例を示した。そのため、横断的な指導をする際の具体場面における生徒の活動内容や指導上の留意点を示すことができた。他方では、全体を俯瞰した年間指導計画の作成することにより、事前はどこで教科横断的な指導を行うのか、教員同士が把握しながら進めることにより、資質・能力を高める効果は、飛躍するととらえる。次のステップとして国語だけでなく他教科とのつながりも意識してスパイラル的な指導を行うことにより、人間関係形成能力を高めていくことが考えられる。その両輪を示すことで、学級活動と各教科等の横断的な指導が蓄積され、次年度以降に生かすことが可能となる。

学級活動と教科の横断的な視点を教員間が持ちながら指導を行うことは、同時に生徒へ同様の視点を示していることになる。それは、生徒自身の横断的な視点を育むことに直結する。さらに、学級活動で学んだことが、他教科でどう生かしたり役立てたりすることができるかを考える視点は、特別活動のキャリア教育への視点へつながっていくと考える。

## 終わりに

本研究の内容は、茨城県内の教員を対象とする意識実態調査と他教科等と関連付けた学級活動の実践の二つで構成されている。そこから見えてきた本県の特別活動(学級活動)の課題とそれを克服する方向性をまとめると次のようになる。

教員を対象とする意識実態調査結果では、他教科等と関連を図った学級活動の指導を行っている教員の割合が50%を下回っており、他教科等と関連付けた指導が行われていないことが本県の課題であることが明らかになった。その背景を大別すると二つの要因があることが見えてきた。一つ目は、現場の教員の多くが、他教科等との関連をどのように図っていけばよいのか、具体的な指導法が分からず、戸惑っている状況があること。二つ目は、新学習指導要領への移行・実施初期に関わる研修や準備等の業務に加え、働き方改革やコロナ渦へ対応も重なり、現場の多忙化が進んでおり、他教科との連携にまで手が届かない状況があること。この二つの要因が他教科等と関連付けた学級活動の指導を難しくしていることがうかがえる。

現場の課題解決の一助となる具体策について、本研究では、中学校第1学年の「学級活動:題材[宿泊共同学習の係活動における学級への貢献度を認め合おう]」と「国語:単元名[内容を整理して説明しよう]」を関連付けた指導例を提案した。この中で、他教科等と関連付けた指導のポイントとして二つの「つなぐ」視点が重要であることを示した。一つ目は、学級活動と他教科等の授業で共通に育成する資質・能力を見出し、それで「つなぐ」視点である。指導例では「人間関係形成能力」を「つなぐ」視点としている。二つ目は、学習内容を「つなぐ」視点である。指導例では、教師が授業の「始め」と「終わり」に学級活動の学習内容と国語の学習内容がどのようにつながるのかを説明・確認している。そこが学習内容を「つなぐ」視点にあたる。この二つの「つなぐ」視点を踏まえた学級活動と国語の指導により、ねらいとしていた「人間関係形成能力」をスパイラル的に育てることができる。また、学級活動の学習が国語の学習の動機付けとなり、国語の本時の目標(教科固有の目標)である「根拠を明確にししながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。」等の実現にも貢献できる。他教科と関連付けた学級活動の指導は、学級活動の充実だけでなく教科の学習も充実させることにつながることも示した。

今後は、多様な実践例(小中校種別・各学年・各教科)及び他教科との関連を位置付けた年間指導計画を開発する研究に取り組みたい。

最後に、新型コロナウイルス感染防止対応や新学習指導要領の全面実施で多忙を極めている中にもかかわらず、本研究を進めるにあたって意識実態調査にご協力いただいた県内小中学校の関係者の皆様に感謝の意を表したい。

## 引用文献

- 文部科学省. 2017.『小学校学習指導要領』, 7. 164-165.  
 文部科学省. 2017.『小学校学習指導要領』, 7.147-148.  
 文部科学省. 2017.『小学校学習指導要領解説 特別活動編』, 46.64.  
 文部科学省. 2017.『中学校学習指導要領解説 特別活動編』, 44.